

佛教經典成立史上に於ける華嚴、如來性

起經について

西

尾

京

雄

目 次

| | | | |
|-------|-------------------------|-----|---|
| 一 | は し が き | 一五 | 頁 |
| 二 | 如來性起經の概要 | 一五 | |
| | イ 異譯本について | 一五 | |
| | ロ 本經の經題 | 一七 | |
| | ハ 組 織 | 一五 | |
| | ニ 内 容 | 一六 | |
| 三 | 如來の出現を説く原始經典 | 一六 | |
| | イ 小乘經典より大乘經典へ | 一六 | |
| | ロ 増支及び増一の經典 | 一七〇 | |
| | ハ 兩傳の殊勝相 | 一七四 | |
| 四 | 兩傳各經の解釋 | 一七 | |
| 五 | 如來の出現を説く原始經典と如來 | 一七 | |
| <hr/> | | | |
| 六 | 性起經との交渉 | 一五 | 頁 |
| | 解深密經の原材としての如來性起經 | 一九 | |
| | イ 解深密經の成立構造上に於ける本經 | 一九 | |
| | ロ 藏傳如來出現經の序品和譯 | 一九 | |
| | ハ 序品の説處について | 一九 | |
| 七 | 十八圓淨の説處より深密・解深兩經は異系統なるか | 一九 | |
| | イ 支那に於ける瑜伽唯識派の三傳 | 一九 | |
| | ロ 深密・解深兩經の説處の差別 | 一九 | |
| 八 | 結 語 | 一九 | |

一 は し が き

大華嚴經 (Avalokita-sūtra) を構成する一品に如來性起品がある。本品は獨立の一經として存在したものであることは異譯に空法護の譯した如來興顯經があることによつて領知し得る。これが大華嚴經の結構より重要な位置を占むることは既に高峯了州教授の論述によつて知るのであるが、實に大華嚴の佛陀觀を敎開する。大乘佛教に於て新經の製作が行はるゝや、佛陀の説法の眞意を開顯するものと心地に立つて發表せられるのであるが、それらのうちにはちかに阿含・尼柯耶の佛語を素材として、それを解釋・演義する經典の顯はれたものも發見・論證せられて來てゐる。

今、この如來性起經は修多羅 (sūtra) ではなく、尼涕婆 (nirdeśa) といはれる經典なのであるが、その成立に當つて如何なる阿含・尼柯耶の佛語を分別・演義 (nirdeśa) したものであるか、又、本經が如何なる内容を持ち、後來の大乘經典の成立に影響を與へたかの一端を實證せんとするものである。

二 如來性起經の概要

イ 異譯本について

佛教經典成立史上に於ける華嚴、如來性起經について (西尾京雄)

如來性起經は大華嚴經の結構より根本支柱と見られ、或は構想の根本的意圖をこゝに置くとも説かれる程基本的なものであつて、華嚴經の佛陀觀が究竟して説開されてゐる。今、本經の概要を説述するに先立つて異譯本について一顧する。

一、寶王如來性起品 東晉、佛駄跋陀羅譯（大正・九・六一一―六三一中）

二、如來出現品 唐、實叉難陀譯（大正・一〇・二六二上―二七八下）

三、如來興顯經 四卷 西晉、竺法護譯（大正・一〇・五九二下―六一七中）

四、Hphags-pa de-bshin-gñeys-pa skye-ba hbyun-ba bstam-pa（勘同目錄、第五九函七五裏―一四二表）

右四經が現存するものであるが、古くより獨立せる一經として譯出されたことが、賢首の華嚴傳卷一（大正・五一・一五五下）によつて知り得る。即ち、

五、如來興現經 一卷 與法護譯題彼品名廣略爲名 西晉沙門白法祖譯

六、大方廣如來性起經 二卷 序分是名號品現正說即是性起品 失譯

七、大方廣如來性起微密藏經 二卷 與前同 西晉元康年出不現譯人

此等のうち(五)は西晉惠帝の世（二九〇―三〇六）の譯出であり、(六)と(七)とは同視され、賢首は異譯と見てゐるが元康年間（西紀二九一年より二九九年）に至る間である。

ロ 本經の經題

本經の題名について三種が差別せられるやうである。

第一、本經の梵名は翻譯名義集一三七八番に *Tathāgatopattisambhavanirdeṣa* (*de-bshin-gyēgs-paṇi skye-ba ḥbyun-ba bstan-pa*) とあるものであつて、如來出現經、如來興顯經、如來興現經、及び藏譯等はその經題より同一流類といふことが出来る。

尙、*Gaṇḍa-Vyūha* ^② には *Buddhopattisambhavamahāharmanirdeṣa* の語を見ることが出来るが、如來興顯經を指示するものに相違なく、華嚴入法界品の本經より後期の成立であることを物語るものである。

第二、寶王如來性起品、大方廣如來性起經等に於ける性起については *gotrasambhava* とあつたものと如く思はれる。このことは華嚴經の教説が性起説であるといはれて、所謂緣起説と殊別せられるのであるから、その原語を決定して置くことは重要であると考へるから後にも縷説するであらう。

第三、大方廣如來性起微密藏經といはれるが、こゝに微密藏といはれることが他經と區別せられる。

かくの如く經題よりして三種類となる。此等の經名が是認せられることは、本經の流通分のうち名受持分に左の十名を擧示することによつて知り得る。

(一) 一切諸佛微密法藏、如來秘密之處、*de-bshin-gyēgs-paṇi gsan-baṇi gnas*。

- (二) 一切世間不能思議、一切世間所不能知 *hyig-ten thams-cad kyis yes-par-dkaḥ-ba.*
- (三) 如來所印、入如來印 *de-bshin-ggegs-paḥi phyag-rgya dan ldan-pa.*
- (四) 大智光明、開大智門 *ye-ḡes kyi mthu chen-po rdsogs-pa.*
- (五) 開發示現如來種性、示現如來種性 *de-bshin-ggegs-paḥi rigs ston-pa.*
- (六) 長養一切菩薩功德、成就一切菩薩 *byañ-chub-sems-dpaḥ thams-cad yān-tag-par-sgrub-pa.*
- (七) 一切世間無能破壞、一切世間所不能壞 *hgro-ba thams-cad kyis mi-hphrog-pa.*
- (八) 隨順一切如來境界、一向隨順如來境界 *gin-tu-ñes-par de-bshin-ggegs-paḥi spyod-yul gyis rjes-su-son-ba.*
- (九) 令一切衆生皆悉清淨、能淨一切諸衆生界 *sems-can gyi khams ma-lus-pa thams-cad rnam-par-sbyoṅ-pa.*
- (十) 分別演說佛究竟法、演說如來根本實性不思議究竟法 *de-bshin ggegs-pa thams-cad kyis bstan-paḥi dge-baḥi rtse-ba. gin-tu-mthar-thug-paḥi mur phyin-pa.*

此等三譯のうち、藏譯のみが第十を二名として數へられ、總じて十一名となる。而して此等十名のうち、第五について如來性起經の經名が起因すとせられる。探玄記卷一六(大正・三五・四一六中)に、

五明開發示現如來種性經、性起品名從此而立、又釋令佛種性起用現前名開示也

とする。従つて如來性起經といはれる原語は如來與顯經といはれるとれと異つて、*Tathāgata-gotra-sambhava* (*utpatti-nirdeśa*) であつたであらう。性起の性とは如來種性 (*tathāgata-gotra*) の義であり、起とは *sambhava*

若しくは *utpatu* であつて、共に、生誕の義である。それ故に、如來性起經 (*Tathāgatagotra-utpatisambhava nirdega*) とは、如來種性の興出・顯現の義を分別・演義すること (*nirdega*)^① を説く教説の義である。

ハ 組 織

次に、本經は組織の上より差別せられる。

第一、如來興顯經は性起品の後に十忍品が附加されてゐる。僧祐の出三藏記集二(大正・五五・七下)に、一本「興顯如幻經」とは、興顯が出現品を表はし、如幻が十忍品を示すものゝ如くである。

第二、大方廣如來性起經・大方廣如來性起微密藏經、此等二本は名號品を序分とし、性起品を正説とするものであつて、西紀三世紀末に譯出されてゐる。

以上は組織についてであるが、序分の説處より、藏譯如來出現經は如來興顯經と相應して重閣講堂なる大宮殿とせられる。

佛駄跋陀羅譯如來性起品、及び實叉難陀譯如來出現品に於ては序分の説處を缺くのであるが、この品は十定品の普光明殿會に攝せられるものである。大方廣如來性起經等は名號品を序分とするのであるから、大華嚴經に編入せられた經典に於ては普光明殿を説處としてゐたものであるかも知れない。

かくの如く考察すれば如來性起經に於てはその組織について諸品の結合したもの、或は序分の説處を異にした

もの等諸種の形式を具したものが存在したやうである。

二 内 容

本經は通途の如く、序分・正宗分・及び流通分の三分に分科せられるが、序分は通序と別序との二部に分たれ、正宗分は性起正法の總說一部と性起身業等の別說九部との十部に、流通分は經名受持分及び表瑞證成分等の二部に分たれる。

先づ、序分について、別序は諸本同一であるが、通序は前述せるが如く、說處を重閣講堂と爲すと普光明殿とするものがあるやうである。従つて教主としての佛陀の徳も差別し、列衆の徳も亦殊異するであらう。

その別序に於て、初めて本經の說法が特異の光景によつて開かれるのであるが、そこに活躍する菩薩は如來性起妙德菩薩と普賢菩薩とである。

その如來性起妙德菩薩^⑤とは如來興顯經では如來族姓成首菩薩とし、その藏譯は De-bshin-gcegs-pahi rigs-su byun-bahi dpal であるから、Tathagatagotrāsambhavarī と梵語に還元せられるであらう。その菩薩名について清涼は左の如く註釋する。

性有二義、一種性義因所起故、二法性義若眞若應皆此生故、亦有釋云、此之妙德卽是文殊說此法門加性起稱、此釋無違大理、以文殊大智爲能顯普賢法界爲所顯、共成毘盧遮那之出現故^⑥。

これによつて如來性起妙德菩薩とは文殊菩薩の異號であり、文殊と普賢との兩菩薩の問答によつて毘盧遮那如來の出現の意義を開顯せんとするものである。その如來の住處は重閣講堂であるが法界宮でもあり、更に又顯曜威宮(vairocana-maṇḍala)とも說かれるから、法界殿或は普光明殿ともいはれるであらう。この法界宮なる大宮殿に住する如來より放光の瑞應が顯現する。第一の放光は眉間の白毫相より明如來法(晉譯)、如來出現(唐譯、*de-bshin-ggegs-pa ḥbyun-ba, tathāgatasambhava*)、如來聖旨(竺法護)と名づけられる大光明が如來性起妙德菩薩の頂に入り、第二の放光は面門より無礙無畏(晉・唐)・無畏究竟(*mi bsteṅs-pahi mthar-phyin-pa*)、不可計億數照明(竺)と名づけられる大光明が普賢菩薩の口に入る。この現相を因縁として如來性起妙德菩薩は如來性起正法(晉、如來出現之法、唐、如來興顯、竺、*de-bshin-ggegs-paṅi skye-ba ḥbyun-ba bstan-pa*)等の十相を普賢菩薩に問うて序分を結ぶのである。

次に、正宗分に於ては其等の十相が説示せられ十段に分つ。十相とは次の如くである。

(一)性起正法(晉、出現之法、唐、如來興顯、竺、*de-bshin-ggegs-paḥi skye-ba ḥbyun-ba bstan-pa (tathāgata utpatisambhavanirdeśa)*)

(二)身(身相、現身、*sku yan-dag-par-bstan-pa (kāya samprakāśana)*)

(三)音聲(言音、暢演弘音、*dbyans rab-tu-brjod-pa (ghoṣa prabhāvanā)*)

(四)心(心意、諸心念行、*thugs kyi mthu (mana-prabhāva)*)

(五)境界 (境界、境界之處、*yul-gyi gnas* (*viśayasthāna*))

(六)行 (所行之行、所歎行、*spyod-yul bstan-pa* (*gocāra nirdeśa*))

(七)菩提 (成道、成最正覺、*mñon-par-byan-chub-paḥi gnas*(*abhiśambodhi-bhavana*))

(八)轉法輪 (轉法、轉于法輪、*chos kyi ḥkhor-lo bskor-ba mñon-par-sgrub-pa* (*dharmacakrapravartana*))

(九)大般涅槃 (入涅槃、現大滅度、*yois-su-mya-tan-las-ḥdas-pa chen-po bstan-pa* (*mahāparinirvāṇanirdeśa*))

(一〇)見聞恭敬供養所種善根 (見聞親近所種善根、示於如來一切德本諸所造行、*de-bshin-gñeḡs-pa rnam mthon-shin thos-pa dan de-bshin-gñeḡs-pa dan ḡgrog-pas dge-baḥi rtsa-ba ḥbyun-ba bstan-pa*)

さて、これより十相の一々について略説しよう。

第一如來性起法 (晋)、如來出現廣大法 (唐)、如來族姓 (竺)、廣大なる諸の如來種姓 (*de-bshin-gñeḡs-pa rnam. kyi. rigs yans*)、こゝに再び四譯語を擧示した據所は序分の重頌であつて、性起の原語として *gotrasambhava* であらうが、その性の意義を提示せんと欲するからである。

この第一相は正しく總説であつて、如來の出現、即ち如來性起法の不可思議なることを開示する。華嚴經の教法に於て無盡緣起の意趣を顯はさんとして十の數によつてするを方規とするのであるが、今も如來性起正法について第一無量の菩提心を發して一切の衆生を捨てざること、乃至第十無量なる諸法の實義を分別し演説すること等の十種の無量の因縁を以て世に出興するといふ法説、その第一大千興造喩として三千大千世界の無量の因縁によ

つて成ずるに譬へ、乃至第十大千饒益喩とて三千大千世界の成じ已りて無量の衆生を饒益するに譬へる等の十喩説、及びその合法とを説く。

第二如來性起の身業は無量の法と行と身と刹とにて一切衆生を教化する法説、第一に如來法身の無邊周普身を顯はす爲に虛空周遍喩、乃至第十に如來法身の如意滿願の身を顯示する爲に寶王稱念の喩等の十喩説及び十身を總結して讚歎する。

第三如來性起の語業が處として至らざること無き聲體廣大等の十種の音聲を説く法説、佛の主無くして平等に法を説いて廢すること無きを譬へた劫盡唱聲喩等十種の喩説及び合法とである。

こゝに第十龍王遍降喩が説かれる。それは龍王が群生を饒益せんが爲に遍く六天を覆うて種々なる大重雲を興し電光を出し異雨を雨らして饒益するが如く、佛も亦無量の大法を衆生に應現せんが爲に先づ身雲を以て法界を覆ひ應ずるが如く身雲を示現することを説いてゐる。そこに説かれてゐる十身は如來の顯現の相を知ることが出来るから列舉しよう。

| | | | |
|----------------------|--------------------|---------------------|------------------------|
| 興顯經(大正・一〇・) 六〇三下) | 晉譯(大正・九・) 六二〇下) | 唐譯(大正・一〇・) 二七〇上) | 藏譯(五九函・) 一〇七表) |
| (一)正覺身 | (一)生身 | (一)生身 | skye-ba hbyun-baḥi sku |
| (二)變化身 | | (二)化身 | sprul-paḥi sku |
| (三)建立身 | (二)神力住持身 | (三)力持身 | byin-gyi-rlabs kyi sku |

(四) 色像身

(三) 色身

(四) 色身

gzugs kyi sku

(四) 種々身

(四) 相好身

sna-tshogs mion-par-bsgrubs-pahi sku

(五) 功德身

(四) 功德身

(四) 福德身

bsod-nams kyi sku

(六) 慧身

(六) 智慧身

(七) 智慧身

ye-ges kyi sku

(七) 隨俗 (十種力)

(七) 不壞身

(八) 不可壞身

stobs la thab-pa med-pahi sku

(八) 四無所畏

(八) 無畏身

(九) 無畏身

mi-gsñens-pa zil-kyis-mi-non-pahi sku

(九) 法界而無身形

(九) 法界身

(四) 法界身

chos kyi dbyiñs lus med-pahi sku

此等のうち、竺法護譯は法身の示現する九身 (藏譯は十身、唐譯には先づ身雲を布くとあつて法身の語は見えないが同意なるべし)、晉譯は清淨身の示現する九身と爲すから、此等の諸身は法身の顯現身なのである。換言すれば法身の世界に示現する相狀が九身若しくは十身である。法身如來性の功用の生起が十身であり、十身の生起身を離れて如來法性身はない。

因に、こゝに生身といふについて藏譯によつて知られるが如く、小乘佛敎に於ける上座部派の父母生身、或は大衆部派の自功德生身といはれる生身 (nirvīta-kāya) ではなくして utpatitsambhava-kāya を原語とすることである。而して共に生身といふものゝ父母生身と言へば、父母の身體と其より生れた身體との二體を考へるのであるが、本經に於ける生身は法性身を離れて生身を異體として考へるのではなく、法性身なる自體の相に於て見る

ものである。竺法護がこれを正覺身と譯してゐるのは原語の異なるにも據るであらうが正覺身とするは極めて興趣深いものと思はれる。

第四如來性起の意義が説かれるが、佛心は佛智より外になく、その智の無量を説示する法説と、その平等無依の智慧を譬へる虛空無依喩等の十種の譬喩を説いてゐる。

第五如來性起の境界 (*viśaya, yul*) についで、一切の衆生及び一切の世間等の境界の無量であるが爲に如來の境界も亦隨つて無量であることを説く法説及び佛の依心無本の智を顯はす龍王心雨の喩等の三譬喩説を教示する。

第六如來性起の所行 (*gocara, spyod-yul*) についで、無著の所行 (*asaktagocara, chags-pa med-pahi spyod-yul*) であることの法説及び佛の圓滿にして分齊無き所行を顯はす飛鳥虛空等の三喩説を開示する。

因に、第五の境界と第六の所行との差別について、その所行が漢譯に行とせられたるがために探玄等に行業即ち *carya* の義に解釋されて來てゐるやうであるが、それは誤である。

解深密經には、如來の所行 (*gocara*) と如來の境界 (*viśaya*) とについで、

如來所行謂一切種如來共有不可思議無量功德衆所莊嚴清淨佛土

如來境界謂一切種五界差別、何等爲五、一者有情界二者世界三者法界四者調伏界五者調伏方便界^①

として區別してゐるが、其等の意義はこの深密の所釋に依憑すべきものである。

第七如來性起の菩提について、眞俗の一切の境の義を覺解する菩提の體性門等の十門によつて分別してゐる。第二業用門について大海印現の譬喩を擧ぐるは大海なる菩提のうちに一切の衆生の心念の洞照することを説くのであるが所謂海印三昧の意味である。第四廣大門は菩提を成ずる時方便に住して身、語、意の三種の清淨無量なることを説示するのであるが、これは又如來性起の身業、語業、意業の略説であり、こゝに菩提正法 (bodhi-nirdega) の義がある。その身業の示現身について次の如く顯示する。

晉譯(大正・九
六二六下)

唐譯(大正・一〇・
二七五上)

藏譯(五九函・
一二六裏)

- | | | |
|-------------|--------------|---|
| (一) 一切衆生等身、 | (一) 一切衆生量等身、 | sems-can thams-cad kyi tshad ji-sñed-pa de-sñed gyi tshad gyi sku |
| (二) 一切法等身、 | (二) 一切法量等身、 | chos thams-cad kyi sku |
| (三) 一切刹等身、 | (三) 一切刹量等身、 | shin thams-cad kyi sku |
| (四) 一切三世等身、 | (四) 一切三世量等身、 | dus thams-cad kyi sku |
| (五) 一切如來等身、 | (五) 一切佛量等身、 | de-bshin-gyegs-pa thams-cad kyi sku |
| (六) 一切諸佛等身、 | (六) 一切語言量等身、 | sans-t'gyas thams-cad kyi sku |
| (七) 一切語言等身、 | (七) 眞如量等身、 | tha-sñad thams-cad kyi sku |
| (八) 一切法界等身、 | (八) 法界量等身、 | de-bshin-ñid dan chos kyi dbyinis kyi sku |
| (九) 虛空界等身、 | (九) 虛空界量等身、 | nam-mkhah'i dbyinis dan sku |

- (一) 無礙法界等身、 (二) 無礙界量等身、 chags-pa med-pa'i dbyins kyi sku
 (二) 出生無量界等身、 (二) 一切願量等身、 rinon-par-bsgrub-pa'i dbyins dan sku
 (三) 一切行界等身、 (三) 一切行量等身、 rnam-par-spyod-pa'i dbyins kyi sku
 (三) 寂滅涅槃界等身、 (三) 寂滅涅槃界量等身、 mya-nan-las-hdas-pa'i dbyins kyi tshad ji-sned-pa de-sned-pa kyi sku

此等の十三身について賢首は探玄記一六(大正・三五・四一三上中)に於て、第一は衆生世間身と解し、第二は同一一切染淨之身、第三は同器世間國土身、第四は同於一切九世十世諸劫之身、第五は同一一切佛證道之身、第六は等一切佛智覺之身となし、このうち第五と第六とは智正覺世間身、第七は能詮の言教を以て身と爲すもの、第八は所詮の法界を以て身と爲すもの、第九は同大虛空無爲之身、第十は同因陀羅網法界之身であつて、互に相ひ渉入するより無礙と名づくもの、第十一は用を起さざることを無き身であるから出生といひ、第十二は徳の備はざる無き身であるから一切行といひ、第十三は體寂せざること無き身であるから涅槃といふのであると註解してゐる。

此等の諸身もまた第三如來性起の語業を説く下に十身を釋したるが如く、一法身の生起身 (utpatisambhava-kāya) であつて性起正法なるものである。華嚴に於ける一毘盧舍那法身が融三世間身であるといはるゝ意趣も觀取せられるやうである。

第八如來性起の轉法輪について、一に體相、二に深廣の相、三に無盡、四に無住、五に分齊、六に出生、七に知益の七門によつて示されるが、總じて性起としての如來出現を說法に於て開示するものである。その第一體相

門よりは、法輪は一切の願を所依として轉ぜられること、第五分齊門よりは一切の文字・言語は悉く性起の轉法輪であること、第六出生門よりは一切衆生の念々心々の行に等しきものを出生するからである。かゝる説、法生起は究竟無礙無畏 (mi-bsheñs-pa chags-pa-med-pa'i mthar-thug-pa) 三昧に依るといはれるが、この三昧の名は又本經別序に於て如來が面門より普賢の口へと放光する無礙無畏光明と同じいものであり、互に前後相應して考察すべきである。

第九如來性起の涅槃について、一に涅槃の體實は眞如にして眞常なること、二に灰斷を簡異し、三に出沒を凝へず、四に器の虧盈に隨ひ、五に起盡は緣に隨ひ、六に用は未來際を窮むることを顯示する。

第十如來性起の見聞・恭敬・供養とは如來の所にて性起法門を見聞し恭敬し供養する善根の功德が窮盡すべからざる法説及びその直證の果について、徳未來際を窮むるを譬へる少金剛を吞む喩、惑障を斷滅するを譬へる小火能燒の喩、大菩提を成ずるを譬へる藥王多益の喩の三喩説をなす。

終りに流通分に於ては第一に受持分として本經の十種の名を示して受持が説かれ、第二に表瑞證成分として瑞相を表はして如來及び菩薩の證を成ぜしことを叙するものである。

三 如來の出現を説く原始經典

イ 小乘經典より大乘經典へ

扱て、大華嚴經に屬する如來出現經の概要を叙述したが、それは華嚴の佛陀觀の施設莊嚴 (gaṇḍi-vyūha) である。善財童子が善知識に親近する求道の歷程はこの性起法門の第十相を廣說敷演せるものと推測せられるが、その入法界品に開示せられる法界とは正しくこの性起正法を内容とするものであらう。かゝる特異なる正法佛身は般若經の法身を説いて生起身について説示すること少きものと對蹠するものであり、般若經の佛身觀より一進展するものであらうが、本經の興起するについて阿含・尼柯耶の佛語を分別・演義 (nirdeśa) せるものと思惟せられるものを發見する。

大小乗の經典に互りて如來の興出或は顯現の意義について語る經典の數多あることを見出すのであるが、小乗の經典に於ては大眾部所傳である增一・八阿須倫品の第二經より第十經に至る九經、それと相應する錫蘭上座部所傳である增支部一・一三・一人品の全七經がある。此等の諸經典がそのまゝ如來性起經の素材と成つたものであることを論證しようとするのではない。茲に阿含及び尼柯耶の傳持する部派は大眾部派と上座部派とのそれであつて、明かに同一原典に源を發する二部派の間に於てさへも後述するが如く佛陀觀に於て差別を有するのであり、殊に未だ般若經に於ける佛陀觀の思想を透過してゐないのであるから、其等阿含の諸經と華嚴の如來性起經とを關聯せしめようとするとは思はざるも甚だしいものであるかも知れない。然し、こゝでは其等の佛身思想の理念の問題よりも寧ろ經の形體構成の中心原材の據所として提示しようとするのである。此等の阿含・尼柯耶の如來出現の經典を如來種性の分別 (nirdeśa) の根本とし、部派佛教に於ける佛身思想、並に般若經等の大乘經典の

佛陀觀の理念を總合し、以て特異なる如來出現の尼涕婆（*Tathagato'patisambhavanideya*）が形成せられるに到つたものであらう。

ロ 増支及び増一の經典

増支部一・一三・一人品

(一)比丘等よ、一人の世に生れつゝ生るゝは、多人の利益のため、多人の安樂のため、世を愍むがため、人と天との義利のため、利益のため、安樂のためなり。

一人とは誰か。如來・應供・正等覺者なり。

比丘等よ、これ即ち一人の世に生れつゝ……人と天との義利のため、利益のため、安樂のためなり。

(二)比丘等よ、一人の世に出現すること難得なり。一人とは誰か。如來・應供・正等覺者なり。

比丘等よ、これ即ち一人の世に出現すること難得なり。

(三)比丘等よ、一人の世に生れつゝ生るゝは希有人なり。一人とは誰か。如來・應供・正等覺者なり。

比丘等よ、これ即ち一人の世に生れつゝ生るゝは希有人なり。

(四)比丘等よ、一人の沒盡して多人愁嘆す。一人とは誰か。如來・應供・正等覺者なり。

比丘等よ、これ即ち一人の沒盡して多人愁嘆するなり。

因比丘等よ、一人の世に生れつゝ生るゝは無二・無侶・無對・無對等・無對人・無等・無等々・二足の長なり。
一人とは誰か。如來・應供・正等覺者なり。

比丘等よ、これ即ち一人の世に生れつゝ……二足の長なり。

内比丘等よ、一人の出現は大眼の出現なり、大光の出現なり、大明の出現・六無上の出現なり、四無礙解を證し、多界の通達あり、種々界の通達あり、明と解脫の果とを證し、豫流果を證し、一來果を證し、不還果を證し、阿羅漢果を證す。一人とは誰か。如來・應供・正等覺者なり。

比丘等よ、即ちこの一人の出現は大眼の出現なり、……阿羅漢果を證す。

内比丘等よ、我はかほどにも如來の轉じたる無上法輪を眞に正しく隨轉する他の一人をも見ず。比丘等よ、それは即ち舍利弗なり。

比丘等よ、舍利弗は如來の轉じたる無上法輪を眞に正しく隨轉す。^⑩

增一・八・阿須倫品・二一八經

(一)諸比丘、若有二人出現於世多饒益人安隱衆生愍世群萌欲使天人獲其福祐。云何爲一人、所謂多薩阿竭・阿羅呵・三耶三佛。

是謂一人出現於世多饒益人安隱衆生愍世群萌欲使天人獲其祐。

是故諸比丘、常興恭敬於如來所、是故諸比丘當作是學。

(二) 諸比丘、若有一人出現於世、便有一人入道在於世間、亦有二諦・三解脫門・四諦眞法・五根・六邪見滅・七覺意・賢聖八道品・九衆生居・如來十力・十一慈心解脫便出現於世。云何爲一人、所謂多薩阿竭・阿羅呵・三耶三佛。

是謂一人出現於世便有一人入道在於世間亦有二諦……十一慈心解脫便出現於世。

是故諸比丘、常興恭敬於如來所亦當作是學。

(三) 諸比丘、若有一人出現於世、便有智慧光明出現於世。云何爲一人所謂多薩阿竭・阿羅呵・三耶三佛。是謂一人出現於世便有智慧光明出現於世。

是故諸比丘、當信心向佛無有傾邪、如是諸比丘當作是學。

(四) 諸比丘、若有一人出現於世無明大冥便自消滅。爾時凡愚之士爲此無明所纏絡生死所趣如實不知、周旋往來今世後世、從劫至劫無有解脫。

若多薩阿竭・阿羅呵・三耶三佛出現世時無明大闇便自消滅。

是故諸比丘、當念承事諸佛如是諸比丘當作是學。

(五) 諸比丘、若有一人出現於世、復有三十七品出現於世。云何三十七品道、所謂四意止・四意斷・四神足・五根・五力・七覺意・八眞行便出現於世。云何爲一人所謂多薩阿竭・阿羅呵・三耶三佛。

是故諸比丘、當承事於佛亦當作是學。

(內)諸比丘、若有一人沒盡於世、人民之類多懷愁憂、天及人民普失蔭覆。云何爲一人、所謂多薩阿竭、阿羅呵、三耶三佛。

是謂一人沒盡於世、人民之類多懷愁憂、天及人民普失蔭覆、所以然者、若多薩阿竭於世滅盡三十七品亦復滅盡。是故諸比丘、常當恭敬於佛、如是諸比丘當作是學。

(外)諸比丘、若有一人出現於世、爾時天及人民便蒙光澤、便有信心於戒・聞・施・智慧、猶如秋時月光盛滿而無塵穢、普有所照、此亦如是。

若多薩阿竭・阿羅呵・三耶三佛出現世間、天及人民便蒙光澤、有信心於戒・聞・施・智慧、如月盛滿普照一切。

是故諸比丘、興恭敬心於如來所、如是諸比丘當作是學。

(八)諸比丘、若有一人出現於世、爾時天及人民皆悉熾盛、三惡衆生便自減少、猶如國界聖王治化時彼城中人民熾盛、隣國弱、此亦如是。

若多薩阿竭出現世時、三惡趣道便自減少。

如是諸比丘當信、向佛是故諸比丘當作是學。

(九)諸比丘、若有一人出現於世、無與等者、不可摸則、獨步・無侶・無有儕匹、諸天人民無能及者、信・戒・聞・

施・智慧無能及者。云何爲一人、所謂多薩阿竭・阿羅呵・三耶三佛。

是謂一人出現於世無與等者不可殫則、獨步・無伴・無有儔匹、諸天人民無能及者信・戒・聞・施・智慧皆悉具足。

是故諸比丘當信敬於佛、如是諸比丘當作是學。

ハ 兩傳の殊勝相

今、前出せる兩傳持の各經の出沒を對照すれば次の如くである。

増支部一・一三

増一・八・二一〇



第八熾盛經

第九無等經

この對照に見るが如く出沒異同あるのであるが、その相應する經典に於ても兩傳の經の所説は全同ではない。従つて此等經典のうち如何なる所説の程度を以て根本佛教若しくは原始佛教の佛陀觀思想の領域であると推定すべきかは甚だ困難なることである。今、兩傳の出沒異同を中心とする特殊相について一顧しよう。

第一、上座部傳の第七舍利子經に相當するものが大衆部傳増一阿含には無い。この經は前六經が佛陀の出現の意義について説示するに對して本經のみ轉法輪について舍利子を他の一人とすることは編入せらるべきものでないものが攝められてゐるが如く考へられるのであるが、このことは上座部に於て舍利子も亦佛陀(buddha)の一人として尊崇せられてゐたが爲に、こゝに他の一人として收められたものでないであらうか。この第七經と相似する經句は増支部・五・一三二(A. N. Vol III. p. 149) 増一・三二・五(大正・二・六七七中)、雜阿・一二二(大正・二・三三〇中)等に見出すことが出来るが、佛陀と等同せられる他の一人(aññam ekapuggala)の語はない。錫蘭分別説部に於ては化地部の如く「僧中有佛」を主張するものであり、舍利子の轉法輪は佛陀と等しく、その智慧も亦佛陀と等しいのであるから法集經所説の同佛の意味に於て舍利弗が他の一人とせられてゐるものでないであらうか。

佛陀(buddha)の呼稱について分別説部に於ては特定の一人の稱ではなく、多聞の比丘を聞佛陀(sutabuddha)。

漏盡の比丘は四諦佛 (catusacca-buddha)、自身通達せる獨覺智 (pucekabodhiñña) のものは辟支佛陀 (paceka-buddha)、一切知智 (sabbaññutañña) のものは一切知佛陀 (sabbañnu-buddha) の四種佛陀を説くのである。此等のうち舍利弗は正しく第二の四諦佛に相當するのであるが、舍利弗の他の漏盡比丘よりも優れ佛陀と等しい諸徳を具有してゐることより同佛の意味に於て他の一人として一經が加へられたものでもないであらうか。これが錫蘭分別説部の特殊的な意義であるが爲に後世の増補であつて大衆部所傳の増一阿含に相當する契經のない所以でないであらうかと推測せられる。

第二、「第二〔難得〕經、第三〔希有〕經の二經に於て見るが如く、佛陀を難得者 (dīḍḍha)、希有人 (acchariya-manussa) と呼稱することを増一阿含に見出すことは出来ない。この稱呼は錫蘭上座部に於ては一時に二佛の出世することを許容しないから特に希有人と名づくのである。難得〔者〕の意味は増一阿含二・二(大正・二・五八二下)にも説かれるが、特説せられる所以は希有人の意味に於てであらう。これに對して大衆部系に於ては十方世界に一時に多佛の出世を教條とするのであるからかゝる稱呼を取らないものであらう。増一阿含所傳の大衆部派に於ては不思議〔人〕^⑩ (acintya-manussa) とも呼稱したのであらうか。不思議人とは我々人間の思惟を以て分別し計量することは出来ない人といふ意味であつて希有人ではあつても見聞・思惟することの出来るのとは兩者の間に殊勝の差別がある。それ故に此等兩經の増一阿含に相應するものが無いといふことも兩派の佛身觀の差別に基因するものであつて偶然の附加・増廣ではないであらう。

第三、大衆部所傳增一阿含の第二一道經、第五道品經等に相當する經典は巴利傳には無い。佛陀の出世に於て初めて道品が顯現し佛陀の世間に行するは道品の外にないのであるからこれ等を集收することは極めて適當であるであらう。殊に第二一道經は一法より増上して十一法を編輯してゐる増一阿含の各法の中より適宜に集輯して一經と成したものと如くである。即ち、第一入道は一集の中にあつて左の如く説示する。

有^ニ入道^ニ淨^ニ衆生行^ニ除^ニ去^ニ慾愛^ニ無^ニ有^ニ諸惱^ニ、得^ニ大智^ニ惡^ニ成^ニ泥洹證^ニ、所謂當^ニ滅^ニ五蓋^ニ思惟四意止^ニ、云何名爲^ニ入^ニ、所謂專^ニ一^ニ心^ニ是謂^ニ入^ニ、云何爲^ニ道^ニ、所謂賢聖八品道是謂名^ニ道^ニ、是謂^ニ入^ニ道^ニ。(增一・一二・一、大正・二・五六八上)

佛陀といふもこの日常の世間心なる一心の開覺より外はない。この心が專一に八聖道を行することが入道であり、それがそのまま佛陀出世の顯現相である。

次に三解脱門は三集(大正・二・六三〇中)、四諦は四集(六三一上)、五根は五集(六七三下)、六邪見滅は六集(七二〇中)、七覺意は七集(七三一上)、八道品は八集(七五五下)、九衆生居は九集(七六四下)、十力は十集(七七六中)、一慈心解脱^⑨は十一集(大正・二・八〇六上)に集録されてゐる。唯、二諦のみ二集の中に無く、それだけ眞諦(paratathā-sacca, paramārtha-satya) と俗諦 (sammuti-sacca, samvīti-satya) との二法分別は後世の思想と見らるべく、從つて第二經は後世の増補として一應考へてよいと思はれる。又、第五道品經も亦巴利傳の支持がないだけ遍い編入とも考へられるが、三十七道品といふ覺證の徳目によつて佛陀の出世相の眞意義を考察することは大衆部的な表現である。

第四、第四闇冥經、第七信（心）經、第八熾盛經の三經も亦巴利傳に相應するものがない。第四闇冥經は如來の出世によつて凡愚の人の無明の大闇が消滅すること、第八熾盛經は三惡の衆生の自ら減少することを教示し、第七信（心）經の如來の出興を以て信・戒・聞・施・慧の五法の塵穢なく人民の光澤を蒙ることを説示する等聲聞乘の人々のみでなく凡愚の衆生をも如來の境界（*viṣaya*）としてゐることは大衆部傳として相應しい。曠劫に生死に周旋しつゝある愚惡の衆生が佛陀の興出によつて解脱することを説いてゐるのであるから、特に凡夫を對機とする淨土經典の思想とも相殆いものがあるやうである。

この外、殘餘の四經典が増支・増一に於て相應するのであつてそれだけ古い傳承を示すものであらうが、然し其等の說相を比較すれば質的な相異があるやうであり、兩派傳承の佛陀觀受容の差別が觀取せられる。

四 兩傳各經の解釋

更に各經について註解しようと思ふのであるが、増一阿含の經句を解釋する基準がないのであるから、こゝでは巴利傳を中心とし偏に佛鳴の註釋^⑩に依り増一阿含を參酌して進めよう。

第一〔利益〕經

一人（*ekapuggala*）の一とは、第二等と對照する數〔量〕より超絶することを表はすものである。人とは世俗

説 (sammui-kahā) であつて勝義説 (paramattha-kahā) ではない。佛陀には二種の教示があり、世俗教示と勝義教示とである。そこで、補特伽羅・衆生・女子・男子・刹帝利・婆羅門・天・魔等と施設するのは世俗教示であり、蘊・處・界等は無常なり苦なり無我なりと説くは勝義教示である。かくの如き一とかの人とで一人である。如何なる義によつて一人であるか。無比 (asadisā)、勝德 (guṇavisittha)、無等々 (asamasana) 等の三義によつていはるゝ。何んとなれば彼は十波羅蜜を漸次に轉修することを始めとして菩提資糧功徳と佛陀功徳によつて如何なる他の大衆とも無比であるから、その無比の義によつて一人である。過去の正等覺者は一切の衆生に對して無等であり、彼等諸佛と俱にこの獨りは色身の功徳 (rūpakāyaguna) と名身の功徳 (nāmakāyaguna) とが等しいから無等々の義によつて一人であるといふのである。

世にとは、虛空世界、衆生世界、行 (saṃkhāra) 世界の中では衆生世界に生れつゝ、天世界・梵世界ではなく人間世界に生れ、この人間世界に於ても中國に生れる。

生れつゝ生る (uppañjānāno uppañjati) とは、この語は二つとも變化語 (vipakatavacana) である。生れつゝ多人の利益のために生れるといふ義であつて他の理由でないと知るべきである。

又、生れつゝ (uppañjānāno)、生る (uppañjati)、生れたり (uppanno) との三語は差別あるを知らねばならない。何んとなれば燃燈佛のみ所に授記を得、佛陀と成る法を求めつゝ十波羅蜜を觀て、此等の法を我は成滿せねばならないとの決心から布施波羅蜜を滿しつゝあるのが、生れつゝといふのである。乃至、不還向の時、不還果

の時も生れつゝといひ、阿羅漢向の時が生るといひ、阿羅漢果の時が生れたりといふ。然し、この經では阿羅漢果の時に關して生るといふのであつて生れたりといふ意味に於て語るのである。

多人の利益のためとは、利益のために生るといふこと、多人の安樂のためとは、多人の安樂のために生るといふこと、世を惑むがためとは、有情世界の憐愍によつて生るといふことである。

天人のとは、天人のみでなく遺餘の龍・金翅鳥等の義利のため利益のため安樂のために生れたりといふ義である。

一人とは誰かとは問であつて、かゝる問は欲話問 (kañcukamyatā pucchā) といふ。

多薩阿竭 (tathāgata) とは八種にして、即ち、(一) 如く到れる (tathā + āgata) (二) 如く歩める、如く去れる (tathā + gata) (三) 眞相を遠得せる (tatha lakṣaṇam āgato) (四) 眞法を如實に現等覺せる (tathadhamme yathāvato abhisambuddho) (五) 眞を見ざる性 (tatha dassita) (六) 眞を語る性 (tatha-vāditā) (七) 如く作す性 (tatha karitā) (八) 勝の義 (abhihavanattha) 等によつて如來といふのである。

阿羅呵、三耶三佛に於て、阿羅呵とは、(一) (一切の煩惱を) 遠離せるが故に、(二) (煩惱の) 賊を (害破せるが故に)、(三) (輪廻の) 輻を害破せるが故に、(四) 資具等 (ハ) を受くるに値するが故に、(五) 密かに惡をなさざるが故にといふ義よりいふと知るべきである。自身に一切諸法の覺性は三耶三佛である。

以上によつて第一「利益」經の語釋を終つたのであるが、本經は正量部傳である三彌底部論にも佛が我ありと

説く經證として引用してゐるから諸部派共通のものと認めることが出來よう。大衆部傳ともよく一致するものである。

因に、此等の語釋のうち、生れつゝ生るについて二義を佛鳴は出してゐるが、その佛陀の生とは、父母よりの生誕に於ていふのではなく、人間悉達多太子が正覺に於て佛陀出世せりといふ意味である。これより華嚴の如來出現經に於てその出現若しくは興顯と譯される *utpatisambhava* の二語にはそれぞれの意義を具有するかも知れない。而して如來出現經に於ける如來とは法性・眞如の意義あることを忘れてはならない。

第二〔難得〕經

顯現 (*pāṭubhāva*) とは、生誕 (*uppati*)、出誕 (*nipphati*) の義である。

世に〔出現すること〕難得とは、この衆生世間に於て、難得・甚難得・最極難得といふことである。佛と成るには四阿僧祇劫（北傳は三阿僧祇劫）と百千劫の間十波羅蜜を成滿して初めて成佛することが出来るのであるから難得なのである。

第三〔希有〕經

希有人とは、希有なる人である。比丘等よ、如來・應供・正等覺者の出現する時は四種の希有 (*acchariyā*)、未曾有法 (*abbhuta dhammā*) が出現する。^② かくの如き等の種々なる希有法を具有することより希有人、修成人 (*ācīṇamanussa*) とする意味で希有人といふ。

第四〔沒盡〕經

沒盡とは、無餘涅槃界に般涅槃すること、即ち、死をいふ。

愁嘆すとは、悲嘆すること、轉輪王の沒盡の時には一輪界（ekacakavāṇa）の天人が悲嘆するのであるが、諸佛の沒盡には一萬輪界の天人が悲嘆するといふ。

第五〔無等〕經

無二（獨歩）（adūṭṭha）とは、第二の佛の無きことが無二である。多聞の比丘は聞佛、漏盡のものは四諦佛、二阿僧祇劫と百千劫との間波羅蜜を成滿し自ら通達せる獨覺智のものは辟支佛、四若しは八、若しは十六阿僧祇劫と百千劫の間波羅蜜を成滿して惡魔の首長を征服して通達せる一切知智のものは一切知佛といはれるが、此等のうち一切知佛を無二といふ。何故なれば彼と同時に他の一切知佛は出生しないからである。

無侶（asahāya）とは、自體（atābhāva、色身）に於ても亦通達法に於ても等しきもの、侶といふものがないこと。無對（appaṃima）とは身體が佛陀に等しく、他の對等のものがないこと。無對等（appaṃisama）とは身體について誰も對等のものがないこと。無對人（appaṃipuggala）とは他の誰も我は佛陀なりと自認し得る人がないこと。無等（asama）とは無對人性、或は一切の衆生に等しきものがないこと。無等々（asamasama）とは過去・未來の一切の佛は無等といはれ、彼等の無等と等しいこと。二足の長（dīpadānaṃ agga）とは正等覺者は無足・二足・四足・多足・有色・無色・有想・無想・非想非々想の衆生の長であるからである。

因に、本經は前經と同じく増一阿含に相應する經典があるが、大衆部傳に無與等者に「不可摸則」の形容句がある。この句は増一・二九・六(大正・二・六五七中)に於て佛國境不可思議を説示するが、その第六に

如來身者不可摸則不可言長言短

と説くに相應せしむべきがやうである。第五無等經は特に佛陀の身體(atabhāva)について開示したものであるが、兩傳承の佛陀觀の差別をこの一形容句に觀ることが出来る。即ち、上座部派に於ては第六經に六無上が説かれ、そのうち見無上とは佛弟子等が眼根によつて佛陀を見奉ることが出来る主張するのであるが、大衆部派に於ては摸則すべからざるものであるとする。前者が父母生身の世間身の佛陀を考察するに對して後者は自功德生身の出世間身の佛陀を受容してゐるのである。

第六「光明」經

眼(cakkhu)とは慧眼である。どれほどのものであるか。長老舍利弗の觀慧と等しく長老目犍連の定慧と等しきものである。光(aloka)明(abhāsa)とは又兩大弟子の慧の光明と等しきことをいふ。この大眼と大光と大明との三は世間と出世間との和合(lokiyalokutaramissakāni)を語りたるものと知るべきである。

六無上(channam anuttariya)とは、見(dassana)無上、聞(savana)無上、得(ābha)無上、學(sikkhā)無上、恭敬(pīricariya)無上、念(ānussata)無上等である。

見無上とは、尊者阿難が早朝如來を眼識によつて見奉ることが出来る。これが見無上である。又、他の豫流若

くは一來、若くは不還の者も阿難の如く見奉ることが出来る。更に、善凡夫人も亦阿難の如く十力を見奉ることを得て見を増長して、豫流向と成る。これが實に見であり、根本見とも無上見ともいはれる。

聞無上とは、阿難上座が常に十力の言葉 ears 識によつて聞くことが出来る。これが聞無上である。

得無上とは、阿難上座が十力に於て信 (saddha) を得る。これが得無上である。

學無上とは、阿難上座は十力の教に於て三學を習學する。これが學無上である。

恭敬無上とは、阿難上座は屢々十力を恭敬する。これが恭敬無上である。

念無上とは、阿難は十力の世出世の功德を憶念する。これが念無上である。他の豫流等・善凡夫人等も亦阿難上座の如く十力の世出世の功德を憶念し念を増長して所應の果を得る。これが念であり根本念とも無上念ともいふ。

此等の六無上は世間と出世間との和合を語りたるものと知るべきである。

四無礙解を證しとて、そのうち四無礙解とは義・法・詞・辯の四無礙解である。義に於ける智慧が義無礙、法に於ける智慧が法無礙、義・法・詞・辯に於ける智慧が詞無礙、諸智慧に於ける智慧が辯無礙である。此等の四無礙解は佛の出世に於て證し佛陀の出世を除いては無きものである。これが證すといふ義である。

多界の通達ありとは、眼界・色界等の十八界は佛の出世に於てのみ通達あり、佛の出世を除いては無いといふ義。種々界の通達ありとは、十八界の種々なる自體と種々なる差別とを通達することである。

明と解脫の果とを證しとはに於て、明とは果智 (phala ñāṇa) であり、解脫とはその餘の果相應法である。

因に、本經は大衆部所傳の第三光明經に相當してゐるが、それと比較して増廣されてゐる。その増補の諸説に上座部派の佛陀觀が顯著に見らるゝやうである。

第七〔舍利弗〕經、本經については註釋に特記すべきものがないから省略する。

以上、佛鳴の註釋を適宜に抄譯したに過ぎないのであるが、上座部所傳の増支部と大衆部傳承の増一部との經典の間に、その佛陀觀を中心として見る限り殊勝なる差別あることを觀取することが出来るであらう。

五 如來の出現を説く原始經典と如來性起經との交渉

扱て、如來性起經が前出せる阿含・尼柯耶の諸經典に源流を發すると提示するのは、第一に其等兩經典の網格が相一致するからである。

大衆部所傳の第一利益經の初に「若しは一人有り、世に出現し、多く人を饒益し、衆生を安隱にし、世の群萌を愍み、天人をしてその福祐を獲せしめんと欲し」て如來はこの世に出現すると説く。如來性起經に於ても亦その正宗分の第一は如來性起法 (*tathāgatasambhava-nirdeṣa*, *de-bshin-gyegs-pa hbyun-ba bstan-pa*) の總説に於て如來の出世は不可思議十無量の因縁によるといはれ、その第一無量因縁は餘の九無量因縁を總攝するものであるが、そこには、「無量の菩提心を發して一切の衆生を捨てず」と説かれてゐる。

次に、利益經の終りに「この故に諸の比丘よ、常に如來の所に恭敬を興せよ」と説く。如來性起經に於ても正宗分の終り第十相には見聞・親近（見聞・恭敬）相を分別し開示する。

かくの如く、兩經の所説の大綱が相一致するといふことが出來よう。

第二に如來性起正法を説く別説の各相は此等の原始經典の中に見られるといふことである。

性起正法の別説九相の中、見聞恭敬相については前述せるが如くであるが、第七成道相・第八轉法輪相・第九入涅槃相等については、その第七成道相は増一阿含の第二一道經、第八轉法輪相は増支部第七舍利子經、第九入涅槃相は増一阿含の第六、即ち増支部の第四沒盡經に於て根據し、其等三相について如來の出世の意義を分別し演義したものといふことが出來よう。勿論、此等の成道・轉法・涅槃の三相は八相成道といはれる佛陀の成道を中心として一期の相狀を考察する中にも見出さるゝものであり、それに由來するとも見られるであらう。然し八相成道はそれ等の相狀を開明するのが目的であるが、こゝではそれ等各相に於ける佛陀出世の意義を開闡するのが主要目的となつてゐるのであるから八相成道説に根據すといふよりも此等の佛陀出世を説示する諸經典に由來すといふべきである。殊に既に説ける第一理由を考慮する時無理なく首肯せられるであらう。

次に、第二身相、第三言音相、第四心意相等の三相は佛陀の三業である。我々人間の顯現相は身・口・意の三業の所作を離れて考察することが出來ない如く佛陀も亦三業によつて觀察せられる。部派佛教に於て佛身の考察について論評の行はれたことが異部宗輪論（述記發軔中一二左以下等に説かれてゐるが、其等の論評の課題は身・

口・意の三相に收約することが出来るやうである。そこでは上座部系の父母生身 (*matrapitunirivita-kaya*) として世間身を考察するに對して大衆部系の自功德生身 (*svaguna-nirivita-kaya*) として出世間身を理念する根本的立場の相違が論證の分岐點となつてゐる。今、原始の阿含・尼柯耶の諸經典に於ても亦其等の議論の萌芽あることは既に論述した所である。

第二身相については増支部第五・増一部第九無等經に説示する。増支部に於ては佛陀の身體等は他に等しきものがないと説いても思議を絶せるものではない。増一部に於ては「不可摸則」と説いて長・短を計量することが出来ないとする。異部宗輪論〔發軔中・一七右〕の大衆部系に於ては「如來色身實無邊際」と極説してゐる。如來性起經に於ては、その如來は法性如來なのであるから如來性起の十身として顯示せられる。その第一身は「佛子よ、譬へば虚空の一切の色處・非色處に處として至らざること無く、而も至るに非ず至らざるに非ざるが如し。何を以ての故に虚空には形色無きが故なり。如來の法身も亦復是の如く、一切處・一切刹・一切法・一切衆生に至るも、而も所至無し。何を以ての故に、諸の如來の身は、是れ身に非ざるが故に、應化する所に隨ひて其の身を示現す。」と無邊周普身を説示してゐる。

第三言音相は増支部の第六光明經に「如來の出現は四無礙解を證し」と説示するに由來し、第四心意相は増一部の第五道品經に開示する三十七道品に根據すと見ることが出来るであらう。

之を要するに、佛身の考察について身・口・意の三相よりすることが原始經典に於て見られ、それが部派佛教

に於ける佛身考察の方規となり、諸大乘經典に於てこれを繼承し、殊に如來性起經に於てはその演義（*nirdeśa*）に専心したのである。

次に、第五境界（*visaya*）相、第六所行（ *gocara*）相について前者は如來三業の加被したまふ世界であり、後者は如來の住したまふ佛國である。

第五の境界相については原始經典に「比丘等よ、一人の生れつゝ生るとは、多人の利益のため、多人の安樂のため等」と説かれ、空間的には十方の三千大千世界がその所領となる。但し大衆部系に於ては一三千大千世界に一佛の出世を許すのであるから一三千大千世界の所領の衆生界を境界とするであらう。又、時間的には増一阿含第二一道經に説かれる九衆生居の會居・已居・當居の群萌が對象とせられる。如來性起經に「一切衆生は是れ如來の境界なり。」と説示する。

第六所行相については上座部系はその佛國がこの土であるから特説せられないが、大衆部系に於ては現在多佛を主張するのであるから他方の佛が他の三千大千世界を領すといはれ、其等の佛の本願に隨つて差別ある佛國の相狀が説示されるのである。

前出せる増一阿含・二九・六（大正・二・六五七中）に佛國境不可思議として、

云何佛國境界不可思議

一、如來身者爲是父母所造耶、此亦不可思議所以然者如來身者清淨無穢受諸天氣一

二、爲_レ是人所造_二耶此亦不可思議、所_二以然_一者以_二過人行_一

三、如來身者爲_二是大身_一此亦不可思議所_二以然_一者如來身者不_レ可_二造作_一非_二諸天所_レ友

四、如來壽爲_レ短耶、此亦不可思議所_二以然_一者如來有_二四神足_一

五、如來爲_二長壽_一耶、此亦不可思議、所_二以然_一者然復如來故與_二世間_一周旋、與_二善權方便_一相應

六、如來身者不_レ可_二摸_一則不_レ可_二言_一長言_二短_一

七、音聲亦不_レ可_二法_一則如來梵音如來智慧辯才不可思議、非_二世間人民之所_二能及_一

と七項に互つて說かれるが、第一より第六は身相、第七は音聲相であつて二相のみを說くが如くであるが、第四と第五とに壽命について四神足と善權方便とあることによつて短壽長壽不可思議とせられるから心意相をも說くといふことが出來よう。それ故に原始經典にあつては佛國境不可思議と說くも如來の身・口・意の三相を離れて考察されてはゐない。それが獨立して考察せられるには他方佛土の思想が擡頭してよりであり、法身如來を說く如來性起經にあつては無礙の所行とも如々の所行とも開示されてゐる。

以上論述することによつて如來性起經の正宗分の十相が先づもつて如來の出現を說く阿含・尼柯耶の諸經の佛語の中に探求せられるのであるから素材として此等に根據すと言ふことが出來ようか。然し屢々闡說するが如くこの如來性起正法の思想が興起するについては部派佛教の佛身思想並に般若經の法身思想等を背景としてゐることを忘れてはならない。

思ふに大乘諸經典に如來興出の因縁を說くものを發見するのであるが、其等のうち、小品般若經相無相品第十

三に如來出世の意義について不可思議等の五相によつて教示してゐる。それは般若の智慧に於て佛陀の興顯を見るのであるから若し原始經典に根源を求めるならば増一部の第三・増支部の第六の光明經といふことが出来る。それは如來の出世を智慧の光明の顯相として見るのであつて如來性起經の正宗分十相の差別よりいはず、第四心意相の般若經的尼涕婆であると言ひ得られよう。又、大無量壽經も亦如來興出の一大事因縁を開闡するものであるが、それは如來淨土の因果と衆生往生の因果とを説くとせられるから所行なる淨土と境界なる衆生界とを説示するのが目的とするので如來性起經の所説より第五境界相及び第六所行相との淨土教義的尼涕婆であるとも言ひ得よう。

然るに佛陀觀の諸義の全般に亘りて如來の出世の意義を開示してゐるものは實に如來性起經である。本經の正宗分十相の第一總説が如來出現の尼涕婆と名づけられると同時に別説の各相も亦尼涕婆なのである。現に藏譯よりいはゞ序品に性起妙德菩薩が普賢菩薩に法を請ふ條下に第六所行相を所行演義 (spyod-ryul bstan-pa, gocarā-nirdeṣa) と名け、第九入涅槃相を大涅槃演義 (yoni's-su-mya-nān-las-ḥdas-pa chen-po bstan-pa, mahāparinir-vāṇa-nirdeṣa) と記されてゐることによつても知ることが出来る。實に本經に於て如來出現演義 (Tathāgata-utpatti-sambhava-nirdeṣa) の經名の相應しく、後來の大乘經典の佛身觀に影響を與へたことの實證せらるゝことも所以ありといふべきである。

六 解深密經の原材料としての如來性起經

イ 解深密經の成立構造上に於ける本經

前述せる成立過程を経て興起せる如來性起經が大方廣華嚴經の佛陀觀である毘盧舍那法身を開顯し、以て華嚴の會衆なる一乘の菩薩をして法界に證入せしめるのである。龍樹時代には既に成立すと考へらるゝ本經は大乘瑜伽行派の人々の佛陀觀の基礎となり、正依の經典である解深密經を製作せしめたのである。

この如來性起經と解深密經との交渉については目下「解深密經の成立構造の研究」と題して「大谷學報」第二十四卷第一號より掲載してゐる。詳細なる論證はそれに譲り、こゝではその結果を要約しよう。解深密經の成立構成は般若經と華嚴經とを以て原材料とするものであり、換言すれば兩經の縮約でさへあるのである。然し成立の意圖は大乗瑜伽師が其等の兩經を素材として瑜伽行派の立場より一經として有機的に構造したものであるといふことである。解深密經の最後品である如來成所作事品は本經の佛陀觀を説示するものであるが、如來の因果圓滿なる法身 (dharma-kāya) と作事圓滿なる生起身 (upātisambhava-kāya) とを廣説するのである。その法身思想は般若經に依り、生身思想は一生起、二身示、三言音、四心生、五所行、六境界、七正覺、八法輪、九涅槃、十見聞等の十相に縁つて分別・論攻せられるが、其等は華嚴、如來性起品の正宗分性起正法等の十相に準據し、そ

の縮約であることを論證したものである。

然るに解深密經の序品のうち、說主である佛陀の二十一徳が説かれるが、それは華嚴經離世間品の普光明殿の說主である佛徳讚歎の經句より借用したものであることを指示し得たのであるが、説法の住處である十八圓淨の淨土の思想はその原型が十地經より得たものであらうと推論するに止まり正しく如來の住處である大宮殿については、尙その根據を鮮明することが出来なかつた。今、藏譯如來出現經を讀解してより十八圓滿の大宮殿の住處も亦如來出現經に縁ることを知り得たのである。これによりて解深密經の成立構造上、序分と正宗分の最後品とが共に華嚴如來性起經を土臺として根本支柱が打ち建てられてゐることを明確になし得たやうである。茲に、前論文の補遺の意味より及び華嚴經と解深密經との親縁關係を究明して解深密經の思想立場を開示せんと欲する爲とより更に論述を進めることゝしよう。

ロ 藏傳、如來出現經の序品和譯

一、世尊は(一)大智によつて開覺せる意樂あり、(二)過去と未來と現在との一切の佛と一身なる平等性を逮得し、(三)一切の佛の行業 (spyod-pa, caryā) は平等性と相應し、(四)無著の所行 (spyod-yul, gcara) を曉し、(五)慧體の法身であり、(六)有相にして無法を究竟し、(七)法界なる無二の所行に遊び、(八)中邊無き平等の現覺を逮得し、(九)無覆の解脫を喜び、(十)法身にして虛空界の邊を盡す。この如來は如來の加持の城なる重閣 (khan-pa brtsegs-pa,

kūṭigāra) S 宮殿 (gṣhal-med khar, namātravegman) に住したまへり。

II. 「その宮殿は」(一)法界宮なり、(二)光明は普照し大莊嚴と相應し、(三)嚴淨なる光明と刹土との顯曜宮なり、(四)佛陀の興出する法界にして中邊無き住處、(五)菩薩の身體より出生せるより自體は光明によつて莊嚴せられ、(六)菩薩の身體が本來止住するものとして成ぜられ、(七)大法の座と成り、(八)法界に遍滿し、(九)如來の光明と相應し、(十)虚空界を盡し、慧の境界、本際「にして」所行は無著によつて顯照せる「住處に」於てなり。

三、菩薩摩訶薩は各自の誓願によつて生じたる妙寶大紅蓮華の中座にあり、會衆のすべては一生補處にして各々の世界より來至せり。(一)大智分別の所行に入り、(二)法界無差別の所依なる平等性に悟入し、(三)虚空界は依止無くして、中と邊と無きを行じ、(四)一切法は生無く成無きを證り、(五)菩薩身のうち動無くして一切知智を證得し、(六)一切世界を教誡し、(七)如來の慧によつて現前し、(八)一切の佛の菩提を現成する慧光を得、(九)如來の所行は斷絶せず、(十)智慧の自體は法身と一にして差別無きが故に無邊なる色身の門を顯示し、(二)中邊無き法界に悟入するを知り、(三)衆生界に遊ぶことより退轉無く、(三)如來の法界と本際との平等性を得ることによつて變化「身」を發起し、(四)毘盧遮那如來と本昔共に生れつゝ善根を積聚するものゝみなり。即ち、普賢菩薩摩訶薩、普稱尊、如來族姓成首、金剛幢英、無盡月淨、日光離垢藏、大神通遊戲慧、離垢光首威光王、慧海上持嚴淨遊戲神通成首、十力無畏大師子吼遊戲神通菩薩摩訶薩なり。かくの如き等の十方不可計數の十萬那由多俱胝の佛國の微塵數の菩薩摩訶薩が俱に住せり。

ハ 序品の説處について

前掲せる如來性起經の序分のうち通序に屬するものは六十及び八十の華嚴には無く、竺法護譯の如來興顯經にのみこれと相應するものがあるが古譯のためであらうか讀解し難い點もあるので藏譯より和譯したのである。

さて、和譯の「如來の加持の城はる重閣の宮殿に住したまへり」とある「重閣」の藏譯は *khañ-pa brtsegs-pa* であつて、梵語若しくは巴利語では同じく *kuṭigāra* (*sala*) である。*kuṭigāra* は尖塔のある建物の義である。「赤沼固有名詞辭典」によれば、重閣講堂、普集講堂、高觀殿等の譯語例が見出されるし、竺法護の普見棚閣も亦その建築物の意義より意譯したものであらう。

「宮殿」の藏譯は *gshal-med khan*、梵語は *namātra-veṅman* であつて華嚴經では常に宮殿と譯されてゐる。竺法護の興顯經ではこの語の直接の譯語が見出されなく。

此等の重閣と宮殿とはこの藏傳和譯に於ては二つの建築物を示すものではなく重閣講堂が宮殿なのである。この重閣講堂を藏傳には十句によつて形容して居る。この重閣講堂は又華嚴入法界品に於ける説處でもあつて、晉譯等に「佛在舍衛城祇樹給孤獨園大莊嚴重閣講堂」（大正・九・六七六上）とあるものであり、これを宮殿と普通名詞で名づけ、それが十句によつて形容せられる内容を持つものなのである。

次に、この宮殿なる西藏語を媒介として解深密經の説處が十八圓滿を内容とする宮殿であることを知る。玄奘

は大宮殿、菩提流支は法界殿と譯してゐる。法界殿といふもその原典に相違があつたのではなく、藏傳如來出現經の宮殿の第一形容句に法界宮 (*chos kyi dbyings kvi shin-po-can*) ともあるから菩提流支の深密經傳承の思想的立場より意譯したものでないであらうか。

更に又この解深密經所説の十八圓淨の淨土については攝大乘論に關説せられてゐることは既に周知の如くであるが、佛陀扇多は大妙堂 (大正・三一・一二下)、眞諦は大寶重閣 (大正・三一・一三下・二六四上)、玄奘は大宮殿 (大正・三一・一五一上、三七六下、四四五下)、笈多も玄奘と同じく大宮殿 (大正・三一・三一八上) 等と譯してゐる。此等のうち、眞諦の大寶重閣とあるを除いてはすべて同一原語であると思はれるが、眞諦のそれは藏傳如來出現經の序文和譯によつて *kuṭāgara* であつたものに相違ない。こゝに眞諦の譯語の説處を介して重閣と宮殿とが同一物を指示することを知る。

かくの如く解深密經の説處として菩提流支は法界殿とし、眞諦は大寶重閣、玄奘は大宮殿とすることを知るのであるが、其等のうち何れを以て原初とすべく、如何なる思想志向より展轉して名を換へて來たかを領知することとは出来ない。然し、解深密經が如來性起經を構成する原材であることを知る時それ等三様の説處は各々許容せられるやうである。

思ふに、華嚴經の思想の立場に於ては祇園の重閣講堂が法界殿であり、その法界殿はまたそのまゝ顯曜威宮 (*ṇam-par-snañ-baḥi shin-po-can, vairocana-maṇḍala*) とはいはれるから大宮殿なる光明殿でもあるのである。

それは華嚴經に於ては釋尊に卽して毘盧舍那法身といはるゝことに相應するのである。

尙、說處について華嚴如來性起經なる本地的經典が解深密經へと垂迹せられる變化性を開明したのに因んで、その說處を十八圓淨として形容する經句のうちにも移植の迹あることを窺知し得るやうであるから一言したい。

それは淨土の果體の圓滿を説く經句についてであるが、菩提流支譯は「善得清淨自在解脫無礙之處」（大正・一六・六六五中）とあり、玄奘譯は「最極自在淨識爲相」（大正・一六・六八八中）となし、諸餘の譯經も亦玄奘譯と相應するのである。此等の兩經句は原典に於て相異するのであつて譯語に起因しての差別でないことは明かである。

この流支譯は藏譯如來出現經に宮殿について十形容句ある第十句に「無著の所行」（spyod-yul chags-pa med-pa）と説くものに親しく、原本はそれと相殆いものであつたであらう。無著の所行とは如來性起經に於て淨土の果相である境界を表現するものであり、菩提流支譯の華嚴的表現に近い譯風であることが觀取せられ、玄奘譯は大乗瑜伽師の唯識思想の成熟に依る變容でないであらうか。

かくの如く解深密經の成立上よりその正宗分のみでなく序分の說處も亦如來性起經に準據して構造せられてゐることを承認せねばならないと思はるゝが、その說處の十八圓淨といはるゝ各形容句が藏譯如來出現經並に竺法護譯如來興顯經の十圓滿の形容句によつて施設することがなかつたのであらうか。このことは解深密經の作者でない限り窺知することを得ないが、その十八圓淨の淨土讀歎の經句を如來性起經によつて補裝せられざるが如く說主である佛德讀歎の二十一句も亦如來性起經に準據してゐない。その二十一經句は華嚴離世間品か或は名號品

よりそのまゝ借用したものである。このことより先に「如來性起經の概要」の條下に述べたが如く、名號品を序分とする大方廣如來性起經もあつたことを傳へるのであるから解深密經の十八圓淨の淨土並に二十一讚歎句より成る佛德が説かれてゐた如來性起經が存在したのであるとも推測せられるやうである。

七 十八圓淨の説處より深密・解深兩經は異系統なるか

イ 支那に於ける瑜伽唯識派の三傳

瑜伽唯識派の經論を傳承した支那の翻譯家は三人ありとせられる。即ち、菩提流支と眞諦と玄奘とであつて彼等は次第の如く地論宗・攝論宗・法相宗とを興起せしめた。而して彼等三人には各々大乘瑜伽行派の正依の經典である *Sandhinirmocana-Sūtra* の翻譯があつて、菩提流支譯は深密解脫經、眞諦譯は解節經、玄奘譯は解深密經といはるゝことは著明である。彼等が各々差別する思想體系を宣揚したのは傳持の經或は論を根底としたものであらうが、今、眞諦の解節經は完譯でないから且らく措き、菩提流支譯と玄奘譯との兩經を比較して、その由來する所の一端を究明しよう。

然るに従來、流支譯の深密解脫經と玄奘譯の解深密經とに關聯して、兩經の思想の基盤について言及したもの少く、或る人は其等に關して「別段の差別無く云々」^②といひ、しかく傳唱せられてゐるやうであるが、その義は

事實とすべきであらうか。異譯の諸經典の取り扱ひについては、同一原本の異譯と見做して一經の語義の不明瞭の時には何等狐疑することなく他の經典の語句によつて訂正し解明して來たことも間々あり、解深密經の傳統の解釋に於ても屢々これを見受けることもあるのである。然し、かゝる改訂上の解釋は會通に終ることが多い。傳燈相承せられつゝある經典にあつては一經の全經語が自内證といふ宗教經驗によつて有機的に統攝せられてゐるものもあるのであるから不用意の下に一語と雖も置換せらるべきでない。解深・深密の兩經に於ても亦、このことが事實として論證せられるのではないであらうか。

ロ 深密・解深兩經の說處の差別

Saṃdhinirmocana-Sūtra はその成立構造より序分・正宗分の始終に互りて如來性起經に準據して構成せるものであることを認容せねばならないであらう。この成立の思想的基盤を考慮して、こゝでは特に十八圓淨の淨土といはれる說處について兩經の讀句を對照し、以て其等の差別を對辯しよう。

(一) 顯色圓滿

最勝光曜七寶莊嚴放大光明

一、法界殿如來境界處

普照一切無邊世界

二、衆寶赫焰一切莊嚴第一之處

三、遍至無量諸世界處

(二)形色圓滿

無量方所妙飾間列

四、放大光明普照之處

(三)分量圓滿

周圓無際其量難測

五、無量善巧差別住處

(四)方所圓滿

超過三界所行之處

六、無有分齊過分齊處

(五)因圓滿

勝出世間善根所起

七、過諸一切三界境界

(六)果圓滿

最極自在淨識爲相

八、出世間上上善根境界成就之處

(七)主圓滿

如來所都

九、善得清淨自在解脫無礙之處

(八)輔翼圓滿

諸大菩薩衆所雲集

一〇、諸佛如來神力住持之處

一一、無量菩薩衆所行處

佛教經典成立史上に於ける華嚴、如來性起經について（西尾京雄）

(九) 眷屬圓滿

無量天龍藥叉健達縛阿素洛羯路荼

一三、無量諸衆天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺

緊捺洛摩呼洛伽人非人等常所翼從

羅伽人非人等之所行處

(十) 住持圓滿

廣大法味喜樂所持

一三、是大法界究竟滿足喜樂之處

(二) 事業圓滿

現作衆生一切義利

一四、畢竟能與一切衆生利益之處

(三) 攝益圓滿

獨除一切煩惱纏垢

一五、離諸一切煩惱垢處

(三) 無畏圓滿

遠離衆魔

一六、離諸一切諸魔怨敵

(四) 住處圓滿

過諸莊嚴如來莊嚴之所依處

諸佛住持莊嚴之處

(五) 路圓滿

大念慧行以爲遊路

一七、大法意去之所明處

(六) 乘圓滿

大止妙觀以爲所乘

一八、奢摩他毘婆舍那大乘之處

(七) 門圓滿

大空無相無願解脫爲所入門

一九、入空無相無願大解脫樂處

(八) 依持圓滿

無量功德衆所莊嚴大寶華王衆

二〇、無量功德衆大寶蓮華王之所莊嚴處

所建立大宮殿中

二一、婆伽婆住如是等不可思議自在之處

此等兩經の對照よりすれば玄奘譯は十八句に規定せられるが流支譯は「何々の處」といふを一句として二十一句に限定せられて相異なるが、内容の増廣はない。而して卒爾に見れば内容の上より殊別し難いのである。然し、此等の十八句若しくは二十一句にあつて最も基本的なる思想を表現するのは玄奘譯の第十八句、流支譯の第一句と第二十句のそれである。

前に「序品の説處について」の項に述べしが如く、解深密經の説處として三種に考察せられることを論じたが、各譯者がその何れに根底を置いたかについてその思想の動向が指示されるが如くである。

先づ、深密經について、第一句は「法界殿如來境界處」とあつて總句とし、その餘の十九句は別句の如く、第二十一句は更に總結して「不可思議自在之處」とする意趣と思はれる。解深經に於ては總別の關係ではなく其等

十八句によつて形容せられる淨土が大宮殿であるとす。大宮殿も法界殿も原語としては同一であるであらうが法界殿と意譯する所にその淨土の概念の動向を示すであらう。殊に流支譯にあつては總句が法界殿であるのであるから、殘餘の句も亦その法界殿の形容句と爲すべきであらう。然らば依持圓淨を顯はすといはるゝ「無量功德衆大寶蓮華王之所莊嚴處」も亦法界殿の喩説と見るべきでないであらうか。

無着造攝大乘論には、この十八圓滿の淨土が開説されてゐるがその淨土の理念について眞諦所傳と玄奘所傳とに差別が見られる。一般に眞諦の傳持する思想が流支のそれに殆いものであるといふことが認容せられてゐるのであるから、眞諦所傳の思想をもつて玄奘所傳の思想と對比せしめ、且らくかの流支の所傳に擬し、以て助顯することゝしたい。

さて、眞諦譯攝大乘論（大正・三一・一三一下）に、

佛世尊在周遍光明七寶莊嚴處……大空無相無願解脫門入處、無量功德聚所莊嚴大蓮花王爲依止、大寶重閣、如來於此中住とあり、玄奘譯（大正・三一・一五一上）に、

薄伽梵住最勝光曜七寶莊嚴……大空無相無願解脫爲所入門、無量功德衆所莊嚴大寶花王之所建立大宮殿中とある。

此等兩經句について論議せねばならないこともあるが、其等は略して直に問題の核心に進むであらう。それは右兩經に説示する十八圓淨の淨土の所依は大寶華王といふ蓮華藏世界であるが、それを如何に釋顯してゐるので

あらうか。

第一に玄奘の所傳の所説を見るに、唐譯、世親攝論釋、第十に「大地等の風輪に依りて住するが如く、この淨佛土は無量の功德衆に莊嚴せられたる大紅蓮華の建立する所なり」(大正・三一・三七七上中)と釋し、玄奘譯親光等菩薩造の佛地經論第一には次の如く細釋してゐる。

(一)復説依持圓滿無量功德衆所莊嚴大寶花王衆所建立、謂如_二地等依_一風輪等_一、或如_二世間宮殿依_一地如是淨土無量德衆所嚴、
(二)大寶紅蓮花王衆生建立、謂紅蓮花大寶所成、如是大寶無量功德衆善所起、

於_二衆寶中_一勝故名_レ大、此寶紅蓮於_二諸花中_一最爲_二殊勝_一故名_二花王_一、

或此寶花望_二諸菩薩善根所起紅蓮花衆_一勝故名_レ大、佛是法王、是佛最勝善根所起故名_二花王_一、又此寶花極難得故名_レ大、
寶花中最勝故名_二花王_一、

此花非_レ一、或花葉多故名爲_レ衆、

世尊住_二此花衆建立大宮殿中_一説_二是契經_一是故説言_二大宮殿中_一、

(三)一、若就_二如來寶受用身_一所依淨土名_二大宮殿_一量同法界、於_レ中_一一佛受用身是能説本名_レ説_二此説_一、

二、若就如來隨菩薩宜現受用身所依淨土名_二大宮殿_一其量不定於_レ中諸佛同現一身正説_二此經_一故此宮殿分量方所不_レ可_二定説_一、
(大正・二六・二九五下—二九六上)

右の所説の如く、その淨土に居する如來が寶受用身なる自受用身或は宜現受用身なる他受用身により、その淨土の量の差別はあつても大寶華王なる淨土を寶華所成の淨土とすることは同一であるやうである。

第二に眞諦の傳持する所説は攝大乘論釋卷一五に、

(一)蓮華雖_レ在_二泥水之中_一不_レ爲_二泥水所_レ汚譬法界眞如雖_レ在_二世間_一不_レ爲_二世間法所_レ汚、

(二)又蓮花性自開發譬法界眞如性自開發、衆生若證皆得覺悟、

(三)又蓮花爲_二群蜂_一所_レ採譬法界眞如爲_二衆聖所_レ用、

(四)又蓮花有_二四德_一、一香二淨三柔軟四可愛譬法界眞如總有_二四德_一謂常樂我常、

(五)於_二衆花中_一最大最勝故名爲_レ王譬法界眞如於_二一切法中_一最勝、

(六)此花爲_二無量色相功德聚所_一莊嚴能爲_二一切法_一作_二依止_一譬法界眞如爲_二無量出世功德聚所_一莊嚴此法界眞如能爲_二淨土_一作_二依止_一、

(七)復次如來願力所感寶蓮花於_二諸花中_一最大最勝故名爲_レ王、無量色相等功德聚所莊嚴能爲_二淨土_一作_二依止_一（大正・三一・二六四上）

とあつて、大寶蓮華王を以て法界眞如を譬へたものとする。

かくの如く、攝大乘論所説の十八圓滿の淨土の依止なる大蓮華王について眞諦と玄奘とは應ずるが如く法界眞如の譬説とすると實華所成とするとの顯著なる差別があるのであるが、翻つて未だ攝大乘論へと移行してゐない深密と解深との兩經の經句について更に考察することゝしよう。

先づ、菩提流支譯深密解脫經の佛陀所居の淨土は二十一句によつて説示せられ、そのうち第一句は總句であり、第廿一句は結句と成つて居るのであるから總別廿句であり、この數の上より十數によつて無盡の教理を顯開する華嚴經の思想圖式と極めて親しい關係にあるといへよう。

總句である「法界殿如來境界處」の法界殿とは先述せる如く大宮殿と原語を同じくするものであらうが、如來

性起經の第一句法界宮とするより源初に依つて意譯して總顯したものでなからうか。従つて別顯の立場にある第十八圓滿の大寶蓮華王を以て法界眞如の譬説とする眞諦所傳は菩提流支傳持の思想と同一動向にあるものと見ることが出来る。

第一顯色圓滿について、その淨土が衆寶の莊嚴と光明の普照とすることは深密・解深同一であつて、藏譯如來出現經の第二句「光明は普照し大莊嚴と相應し」といふと同一思想であつて法界殿の説顯としてよい。第二形色圓滿の「無量の普巧ある差別の住處」とはその顯色ある淨土を形狀の上より施設したものに過ぎない。

第三分量圓滿の「分齊有なること無く、分齊の處を過ぐ」といひ、如來性起品に如來の所行 (gocara) について「如來の〔所〕行には分齊無きが故に量るべからず」(大正・九・六二六上)とあつて法界の説示である。

第四方所圓滿に「一切の三界の境界 (gocara) を過ぐ」とは眞諦譯攝大乘論釋の「法界眞如の世界に在りて世間法の汚す所とならない」といふ意義であるであらう。第五因圓滿の「勝出世間の善根の起す所」とは、同論の「法界眞如の無量の出世の功德聚の莊嚴する所」と説示するに相應する。

第六果圓滿の「善く清淨自在解脫無礙の處を得」とは「序品の説處について」の項に論示せる如く玄奘譯解深密經の經句と殊異し、法身を開示する藏譯如來出現經の第九句に殆い。

第七主圓滿の「諸佛如來の神力住持の處」とは、玄奘の「如來の都する所」と譯すると原典は同一句でないかと思はれる。ラモート (Etienne Lamotte) は藏譯 de-bshin gyes-pahi gnas を tathāgatavihāra と還元するが

諸本より推して *tathāgata-adhiṣṭhāna* とすべきでないであらうか。藏譯如來出現經には大宮殿を如來加持の城 (*de-bshin-gyegs-paṅi byin-gyis-rlabs kyi pho-bran*) とあるに原由すると思はれる。

第八輔翼圓滿の「無量菩薩衆の所行處」とあるは眞諦譯の攝論釋に「法界眞如は衆聖の用ふる所となる」と解釋するに同じ。

第九眷屬圓滿の「無量の諸衆天龍等の所行の處」とは、測疏に、淨土は三界の所行を超過した處であると説かれるに其等の眷屬が存在する所以を佛地經論等の所論によつて會通してゐるが、既に華嚴經の説處は摩竭陀國の寂滅道場であり、そこがそのまゝ衆寶雜華の淨土であつて、そこに多くの眷屬が會衆として聽法する。華嚴經の思想より法界眞如の境界として其を會通する要もあるまい。

第十住持圓滿とは「是れ大法界究竟滿足喜樂の處」とするは玄奘譯の「廣大の法味の喜と樂とに持せられ」とあるによつて更にその意味が明示せられるが、藏譯如來出現經の第七句「大法の座となり」と同義であらう。

第十一事業圓滿、第十二攝益圓滿、第十三無畏圓滿の諸經句は如來の光明の益を差別したものであつて藏譯出現經の第九句「如來の光明と相應し」といふ意義を分別し施設したものと見られる。

第十四住處圓滿とは深密に「諸佛の住持する莊嚴の處」とし、解深に「諸の莊嚴に過ぎたる如來莊嚴の所依處」と説示するが、その莊嚴は本質としては如來の光明より外ないのであるから藏譯出現經の第五句「菩薩の身體より生じたるより自體は光明によつて莊嚴せられ」といふに相應せしめ得よう。

第十五路圓滿、第十六乘圓滿、第十七門圓滿等の三經句は藏譯出現經の第十句に「虚空界を盡し、慧の境界、本際（に）して」なる所行は無著によつて顯照せる住處」と説示する境界の差別を施設したものとも見られようか。淨土の圓滿相について、その道路とか乗物とか或は入門等と説く所に淨土を實體視する思想を窺ふことが出来る。菩提流支の經句に於ては玄奘譯の如く有相の説相の動向が明かでない。

第十八依止圓滿については前述せる如くである。流支譯の「是の如き等の不可思議自在の處」の結句について、その不可思議とは、本來、佛身を詮顯する言葉であつて、深密解脫經にも「文殊師利、彼佛法身有二種相不可思議、何等爲二所謂法身離諸戲論、離諸一切有爲行相」（大正・一六・六八五上）と説示せられるが如く、受用土或は變化土を現はすよりも法性土を開示するに親しいものがあると思はれる。

かくの如き十八圓滿の淨土について、眞諦譯攝大乘論釋第一三（大正・三一・二五〇上）に、諸佛の無量の寶土と菩薩の大人集輪とは佛の應身（受用身）に依りて成じ、應身を離れてはこの二事成ぜずといふことより受用土なりとするが如くであるが、それは佛地經より興起せる三身思想成立によつて判釋するものであつて、解深密經の成立位態に於ては法身と生身との二身門なのである。

この事實より上述の所論を批判すれば菩提流支譯深密解脫經所説の佛身所居の淨土は法性土を開顯し、之に對して玄奘譯解深密經に於ては生身土を顯示せんとする動向にあるものゝ如くである。菩提流支の金剛仙論卷四に淨土を釋して、

正是諸佛依報眞實智慧第一義土、此土以眞如法性爲體、卽蓮華藏世界（大正・二五・八二七中）

とありて、これは金剛般若經所説の淨土義を三身思想を根底とし華嚴思想を以て判定せるものであつて、般若經本來の思想より離れたものゝ如くであるが、菩提流支の傳持の思想立場を標示するものでないであらうか。

八 結 語

以上の論述によつて如來性起經がその成立の素材を原始の諸經典に仰ぎ、部派佛教より初期大乘佛教に至る佛陀觀を統合して、如來の出現の意義を廣釋せる尼涕婆（nirdeṣa）であることを知つた。更に、それが大乘瑜伽行派の人人をして自宗創建の經典、解深密成立の大綱の基礎と爲さしめると同時にその佛陀觀を組織せしめたことをも論證した次第である。

かくの如く、解深密經成立の根本資料の一つが華嚴經の思想に根基することが實證せられるのであるから瑜伽唯識派の根本正依の經典の思想研究については廣義に考察せねばならない。尙、如來の出現の意義を説く大乘の諸經典に、この華嚴、如來性起經の思想の受容も行はれたことも豫想せられるのであつて、其等の經典の敎説の展開について深い究明が要請せられるであらうといふことである。

註① 如來出現の思想と華嚴經結構の意圖、高峯了州、「龍谷學報」第三三一號、二九頁・三四頁。

- ② The Gandavyūha-Sūtra, part III, p. 301 1? 四十華嚴 (大正・一〇・七八六中) 於佛聽聞正法、六十華嚴 (大正・九・七五五下) 聞佛出世歡喜無量 (大正・九・七五五下)、八十華嚴 (大正・一〇・四〇六下) 參照。
- ③ 六十華嚴 (大正・九・六二九下)、八十華嚴 (大正・一〇・二七七中)、藏譯、第五九函・一三六裏—一三七表。
- ④ Nideśa の意義については、萩原雲來文集四七一頁、「無量義とは何か」を參照。
- ⑤ この菩薩について、高峯了州氏は龍谷學報、第三三一號、三七頁、「如來出現の思想と華嚴經結構の意圖」に、入法界品の列衆、佛種上菩薩 (大正・一〇・三一九中)、晉譯、如來性起上菩薩 (大正・九・六七六中)、四十華嚴、如來種姓出生菩薩 (大正・一〇・六六一中) を對照せられるが、梵本 (Gandavyūha p. 412) yは Tathāgatakulagotrōdāgata としな。
- ⑥ 華嚴經疏、四九 (大正・三五・八七二中)
- ⑦ 解深密經卷五 (大正・一六・七一〇下)
- ⑧ 興顯經 (大正・九・六〇九下)
- ⑨ A. N. I. 13 Ekapugala-Vaggo (Vol I, p. 22—23)
- ⑩ 拈弧して經名を舉示したのは増支部に於ては増一阿含の如く一經としての體裁を爲して居らず又各經の經名があるのではないが便宜上増一と相應せしめんが爲である。
- ⑪ 論事下卷三五〇頁參照。
- ⑫ Manorathapūraṇī p. 115
- ⑬ Saṃmōha-vīrodhanī p. 433
- ⑭ 增一・二九・六 (大正・二・六五七中)
- ⑮ 十一慈心解脫とは(一)臥安、(二)覺安、(三)不見惡夢、(四)天護、(五)人愛、(六)不毒、(七)不兵、(八)水、(九)火、(十)盜賊終不侵

佛教經典成立史上に於ける華嚴、如來性起經について（西尾京雄）

二一〇

狂、(二)若身壞命終生梵天、

①⑥ Manorahapūraṇī XII. p. 94—124

①⑦ 長尼柯耶註光顯妙吉祥 (Sumaṅgala-Viāsini I 59—67) に總じて九種の觀方を擧ぐ。荻原文集。怛他伽多と云ふ語の起原と其意義。赤沼智善著、原始佛教之研究、如來の名義に就いて、等參照。

①⑧ 解脫道論卷六（大正・三二・四二六下）參照。

①⑨ 三彌底部論卷五（大正・三二・四六三上）

復次諸部何故說有_レ我、答一人出世多人得_二安樂生_一故、佛語_二諸比丘_一一切功德人生_二在世間_一多人得_二安樂_一故、

國譯一切經、毗曇部・六・七頁參照。

②⑩ 佛陀の出現の時、即ち、入胎・出胎・成道・轉法輪の四時に無量・廣大の光明 (abhāsa) が出現すと説き（増支部・四・一二七 Vol II. p. 130）、不染著法、五道の退轉、憍慢の除去、無明の對治の四未曾有法が出現すと説く（増一・二五・三・大正・二・六三一中）。

②⑪ 増一・二一・一（大正二・六〇二上）參照

②② 寶王如來性起品（大正・九・六一六上）

②③ 右同（大正・九・六二五上）

②④ 花田凌雲著、唯識要義、一六頁。

②⑤ Saṁdhirimuccana-Sūtra p. 32.